慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2019年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：人間の心性・身体性の歴史を考える：古代・中世を中心として：コメント2：環境史の鍵概念としての主観性と史料探索の今後
Sub Title	Symposium at the 2019 annual meeting : considering the history of human mentalities and body : focus on the ancient and medieval times : comment 2 : subjectivity as a key concept for environmental history
Author	赤江, 雄一(Akae, Yūichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.137(137)- 145(145)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム「人間の心性・身体性の歴史を考える――古代・中世を中心として――」

コメント2：環境史の鍵概念としての主観性と史料探索の今後

赤江雄一

本コメントでは、極めて概括的なかたちではあるが、一九七〇年代以降世界の多くの国々で展開してきた環境史の流れのなかに、三宅・大喜両報告を位置づけたい。その際、環境史研究に焦点を当てた世界初の学会であるアメリカ環境史学会の創設メンバーであるJ・ドナルド・ヒューズが著した『環境史入門』での研究整理を参照枠とする。[1] 原著の第一版は二〇〇六年刊だが、世界各地の研究動向について大幅な加筆がなされた二〇一五年の第二版が、日本語に翻訳され二〇一八年に刊行されている。

以下では、まずヒューズの環境を扱う歴史学の主題の分類にしたがいながら、近年なされつつある環境史研究の展開の方向性について、国内外のいくつかの研究に（西洋史、日本史等は問わず）触れつつ、主観性を中核に据える三宅報告を位置づける。その後、大喜報告に即して、身体の歴史、あるいは環境の心性史に関する史料探索の今後について触れる。

環境史の三つの主題

三宅報告と同様に、ヒューズは「環境」があくまで人間中心的な概念であるとした上で、一九七〇年代以降、環境を扱う歴史学が扱ってきた主題を大きく三つに分類している。第一は、人間の歴史に対して環境要因が与える影響、第二は人間の活動と環境との相互作用、第三は自然環境を巡る人間の思想や態度に関する研究である。[2]

この三つの主題のグループのうち、第一の領域につい

て、日本でもよく知られるエマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリは、気候がどのように人間の歴史に影響をあたえてきたかについて論じている。[3] 日本では、この主題は自然災害との関連でしばしば考察されてきた。阪神大震災や東日本大震災など近年の大規模な地震、将来起きることが十分に想定される富士山の噴火や南海トラフ地震などが意識され、過去の自然災害に注目する研究や著作は数多い。[4] ここには自然災害を避けられない島国の住人がもつ切迫感がある。これに対して、前述したヒューズは「災害は環境史において最も重要な出来事の一部を構成する」と述べはするものの、そうした災害に対する直接の危機感を共有していない。[5] しかし、その状況は予期できないかたちで変化しうるだろう。

第一の主題を探索するうえでの文献史学者にとっての困難は、自らの領分を越えねばならない側面がでてくることである。自然科学系の研究（者）とのコラボレーションが必要となる所以である。

社会経済史のさらなる展開としての環境史

ヒューズは、環境史においてもっとも盛んに研究がなされてきたのは、第二の「人間の活動と環境との相互作用」という主題に関するものだという。この問題系に関して、代表的な環境史研究者であるヨアヒム・ラートカウに注目しよう。日本語訳がある大著『自然と権力―環境の世界史』において、彼は環境史の対象を「人間と自然との異種混合的な諸結合における組織化、自己組織化、そして解体の諸過程こそ、環境史における探究の対象」と定義づけ、この過程に「権力」あるいは「支配」という角度から接近する。[6] 日本において、ラートカウのそれと重なる問題意識を展開する環境史研究は、例えば、近世以降を扱う『メトロポリタン史学』第一二号（二〇一六年）の「〈特集〉近世・近代における都市と開発―環境史の視点から」に収められた諸論文、そして松沢裕作編『森林と権力の比較史』（二〇一九年）である。[7]

この第二の主題を扱う「環境史」研究が盛んな理由は、社会経済史との連続性にある。たとえば、三宅報告も引く高木徳郎『日本中世地域環境史の研究』の序章は、環境史への流れをかたちづくる大きな流れとして、荘園史を中心とする社会経済史への展開をもっとも重要なものとして挙げる。[8] また、古代・中世エジプトを対象とする研究プロジェクト「環境・農業生産・記録管理―文書史料に基づくエジプト環境史の構築」に注目しよう。これ

が目指すのは「エジプトにおける環境変動と農業生産の相互作用を探り、そこに現れる変化が、支配や、国家による記録管理のあり方にどのような影響を与えたのかについて考察すること」[9]であるが、このプロジェクト自体が「社会経済史の新たな展開」であるとこれを率いる熊倉和歌子は明示的に述べている[10]。社会経済史があつかってきた史料と分析は、「人間の活動と環境との相互作用」を扱う環境史に適合的だといえる。

こうしてみたときに、三宅報告と大喜報告の両方が、「環境史」を志向しつつも社会経済史から距離をとっていることは、本シンポジウムの際だった特徴をなすものといえるだろう。

主観性と環境史

本シンポジウムにおける二報告が直接関連するのは、ヒューズの言う第三の主題、すなわち自然環境を巡る人間の思想や態度である。ヒューズは、ここに「自然の研究、すなわち生態学という科学、そしてさらに宗教、哲学、政治思想、大衆文化などの思想の体系が、自然のあらゆる側面をどのように扱ってきたかに関する研究も含まれる」と述べる[11]。この主題系に関連して、ヒューズの考えと三宅報告が提唱する「環境の心性史」との間にはどういう差異があるだろうか。

三宅報告の特徴はなによりも、「環境／環世界 Umwelt」概念をはじめて提唱したヤーコプ・フォン・ユクスキュルにまで遡り、そこからあらためて主観性と切り離せない「環境」史の重要性を指摘したことだろう。ユクスキュルは以下のように述べる。

> 主体が知覚するものはすべてその知覚世界（Merkwelt）となり、［主体が］作用するものはすべてその作用世界（Wirkwelt）となるからである。知覚世界と作用世界が連れ立って、環世界（Umwelt）という一つの完結した全体を作り上げているのだ[12]。

ここにあるように「環世界／環境」という概念は、「知覚し作用する主体」を中心におくことではじめて成立する。ダニや甲虫、コクマルガラスなどあらゆる動物が、そういう主体としてそれぞれ固有の環世界／環境をもっていると強調されている点は重要である。これに対して、歴史学者が「環境」という概念を用い「環境史」について考えるときには、基本的に（当然のように）「知覚し／作用する主体」を人間として措定する。人がどう自らのまわりの世界を知覚し認識するのか、という主観性

は、三宅報告が述べるように「環境」という概念の起源にまで遡る根本的な論点である。

ここまでくると、環境を「知覚し／作用する主体」の「知覚」に対応するのが、ヒューズの言う第三の問題系であり、「作用」に対応するのがヒューズの第二の問題系であるとわかる。すなわち、ユクスキュルの根本的発想は、環境史研究のその後の展開と対応していると言える。しかし、どういうわけかヒューズの『環境史入門』には、環境概念の祖であるユクスキュルへの言及が皆無である。他方、ラートカウは『自然と権力』のなかで以下のように述べる。

今日の生態学は［ユクスキュルの提唱した］環境概念とはほとんどなんの関わりもない。しかし、この概念は歴史的環境研究には適している。文献資料を正しく理解するには、林務官の目に映る森林が、農民や牧人そして休息をもとめる都市生活者の目に映る森林とはことなっていることを、思い起こすことが重要である。〈中略〉「環境学とは、外部へと移された心の探究〔心理学〕の一種である」とユクスキュルは書いている。環境史はまた心性史でもあるのだ。(13)

すでに触れたように、ラートカウ自身の研究がこの方向性を全面的に推し進めているわけではないが、この言明は三宅報告とかなり近い地点を指し示していると言えるだろう。三宅報告の唱える「環境の心性史」は、最初から「環境」概念の根底にある主観性の問題を「環境史」の中心に据え直して、全方位的に展開させ、様々な研究領域をひとつの系として繋げるものだといえるだろう。災害をどのようなものとして人びとが意識していたか、という笹本正治『中世の災害予兆』で論じられた問題に三宅報告が触れるとき、前述したヒューズの第一の主題が、第三の主題の側からアプローチされていると単に述べるのでは十分ではない。「環境史」というのであればすべからく主観性の領域にまで掘り下げるべきだという、ラディカルな主張が展開されているのである。言い換えれば、「環境の心性史」は、ヒューズのいう「第三の主題」を特権的な水準で捉えている。第三の主題は、第一や第二の主題と同水準で並列されるものではない。前二者の研究はそれ自体で意味があるというよりも、「環境の心性史」への接続を前提としてはじめて有意義とされるのである。

この主張をラディカルに過ぎると感じる向きもあるだ

ろう。しかし、ヒューズの整理にみられるように、元来「環境」概念自体に組み込まれている主観性の概念が後景に退いている状況において、それを「環境史」研究の中心にひきもどそうとする三宅報告の意義は大きいと考える。

環境を認識する身体

こうした主観的に世界＝環境を捉えるという志向は大喜報告にも共通しているが、大喜報告はその契機として「身体」にとりわけ注目している。このシンポジウムにおいて三宅報告が総論とすれば、大喜報告は、中世日本における身体を経由した「環境の心性史」の具体論ともいえる位置づけとなっている。人が主観的な世界をひろげて環境を認識していくときの基盤に「身体」があるからである。生物学的には中世日本の人間の「身体」は、現代人のそれと基本的には大きくかわらないとしても、歴史を通じて身体をどのように捉えるか、そして身体を通じて世界をどう把握するのかには大きな変化があった。

中世日本の身体の捉え方に対して、さまざまな興味深い事例を通じてアプローチする大喜報告は、身体もその対象の一部として扱った中世ヨーロッパの社会史関連の著作にインスパイアされながらも、自身が研究過程で出会った「尺度」としての身体の問題を独自に深めている。[14]

どのように史料を見つけるのか

大喜報告で扱われているような身体、あるいはさらには「環境の心性史」については、どのように史料を見つけるのか、という問いが実際的に重要な問題である。新しい問題意識はよいが、どうやってそれに応える史料を見つけるのか。中世の人々は顔をどのように認識していたのか。それについて語る史料をどうやったら見つけることができるのか。大喜報告では手がかりとなる事例があげられているが、そういう事例を見いだす、あるいは見いだせそうなところに当たりをつけられるまでの時間は並大抵のものではないだろう。

この問題は、日本における西洋史学、とりわけ社会史研究にとってはとりわけ深刻な問題だった。日本の社会史をある東洋史研究者が揶揄的に「密輸史学」と述べたというエピソードが二〇年ほど前に紹介されたことがある。これは「史料博捜に基づいた現地の研究者による研究書に素材的事実を追いながら、それを取捨選択して自前の論文としてまとめ上げるケース」、あるいは「『タネ

本』とまでは言わないにしても、おりおり現地の文書館に出かけて先行の研究書を道しるべにして、限られた未公刊史料に目を通してくる」といった事態を指している。（このエピソードが現れる論考をきっかけとして、日本における西洋史研究のあり方についての重要な議論が巻き起こった[15]）。地道な史料探索と分析は必要だが、時間・エネルギー等の資源を無尽蔵に費やせるわけでもない。大喜報告には、その史料探索の着眼点に教えられるところがおおい。

一つの突破口は、それまである角度から論じられてきた史料に対して、別の角度からの問いかけが投げかけることによって新たな史料解釈を拓く場合である。前述した環境史の第二の主題に関する研究がさかんなのは、この点にも関わっている。すなわち社会経済史的研究で用いられてきた史料に対して、環境史的な問いを問うた場合の生産性が高いのである。

今後の展望としては、やはりデジタル・ヒューマニティーズのさらなる展開が期待されるところである。これまでの刊行史料がデジタル化され、データベース化の動きが進むことで、一点一点史料を読んでいくのとは異なるかたちでの史料探索が可能になってきている。当然のことながら、検索可能になることはあくまで事例発見の契機に過ぎない[16]。しかし問題意識と史料の出会いを広げていく動きに対して後ろ向きでいることはありえないだろう。

附録

ポリティープレス「〜史とは何か」

叢書既刊および日本語訳一覧

Polity Press: What is History? Series

Peter Burke, *What is Cultural History?*, 3rd edn（2019）ピーター・バーク『文化史とは何か増補改訂版』長谷川貴彦訳、法政大学出版局、二〇一〇年

James Raven, *What is the History of the Book?*（2018）書物史

Stephen Morillo & Michael F. Pavkovic, *What is Military History?* 3rd edn（2017）; 2nd edn（2012）軍事史

Barbara H. Rosenwein & Riccardo Cristiani, *What is the History of Emotions?*（2018）感情史

Jeffrey Weeks, *What is Sexual History?*（2016）性の歴史

Peter Burke, *What is the History of Knowledge?*（2015）知識の歴史

Richard Whatmore, *What is Intellectual History?*（2015）インテレクチュアル・ヒストリー

J. Donald Hughes, *What is Environmental History?* 2nd edn（2015）ドナルド・ヒューズ『環境史入門』村山聡・中村

博子訳 岩波書店二〇一八年

Shane Ewen, *What is Urban History?*（2015）都市史

Brenda E. Stevenson, *What is Slavery?*（2015）奴隷制

Pero Gaglo Dagbovie, *What is African American History?*（2015）アフリカ系アメリカ人史

Andrew Leach, *What is Architectural History?*（2010）アンドリュー リーチ『建築史とは何か』横手義洋訳 中央公論美術出版、二〇一六年

Sonya O. Rose, *What is Gender History?*（2010）ソニア・O・ローズ『ジェンダー史とは何か』長谷川貴彦・兼子歩訳 法政大学出版局、二〇一七年

Christiane Harzig & Dirk Hoerder, *What is Migration History?*（2009）移民史

Pamela Kyle Crossley, *What is Global History?*（2008）パミラ・カイル・クロスリー『グローバル・ヒストリーとは何か』佐藤彰一訳、岩波書店、二〇一二年

John H. Arnold, *What is Medieval History?*（2008）（ヨーロッパ）中世史

John C. Burnham, *What is Medical History?*（2005）医学史

註

（1）J. Donald Hughes, *What is Environmental History?*, 2nd edn（2015）: 1st edn（2006）日本語訳は、ドナルド・ヒューズ『環境史入門』村山聡・中村博子訳、岩波書店、二〇一八年。原著はポリティー・プレス Polity Press 社の様々な歴史学の「入門」叢書の一書である。同叢書の一部が日本語の翻訳として様々な出版社から刊行されている点は日本の読者にあまり意識されていないかもしれないので本稿の附録として一覧を添える。なお、言わずもがなであるが、環境史についてアメリカの研究を範とすべきなどとは意図していない。

（2）上掲書（日本語訳）、三―八頁。この三領域は、ヒューズと同様に初期の環境史研究を牽引したドナルド・ウォースターが、一九八九年に「環境史」の研究領域としてあげた以下の三領域とおおよそ重なっている。㈠自然が示す変化のなかで自然そのものを理解しようとする努力、㈡人間の経済活動の諸相や社会の組織化、それらが環境に及ぼす様々な影響、それらの活動に関わる意志決定について社会階層における様々な部分が有する権力の検討、㈢人間やその社会が自然に対して多様に抱いているすべての考え方（思想、感情、直観、科学、哲学、法学、宗教を含む）。Donald Worster, 'Doing Environmental History', in Worster, ed., *The Ends of the Earth: Perspectives on Modern Environmental History* (Cambridge University Press, 1988), pp. 289–307 (p. 290). ヒューズ、一三〇頁。

（3）日本語訳があるものとしては、エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ『気候と人間の歴史㈠猛暑と氷河 一三世紀から一八世紀』稲垣文雄訳、藤原書店、二〇一九年、同『気候の歴史』稲垣文雄訳、二〇〇〇年。

（4）日本中世から古代についての研究は、高木徳郎『日本中世地域環境史の研究』校倉書房、二〇〇八年、一二〜

一九頁、三八～四一頁に纏められている。野口武彦著『安政江戸地震』ちくま新書　一九九七年（ちくま学芸文庫、二〇〇四年）、清水克行『大飢饉、室町社会を襲う！』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館、二〇〇八年など。

（5）「火山噴火や津波は自然現象であるが、被害が出るのは、住居や基幹施設であるインフラストラクチャーを危険があるとわかっている場所に設置するという選択の結果である場合が多い。日本は福島の原子力発電所を海岸沿いに設置し、イタリア人たちが家を建て続けているところは、ヴェスビオ山が将来的に噴火すれば破壊されてもおかしくはない地域である。災害が起こりうる場所に移り住む愚かさと、保護する難しさはクレイグ・コルトンがニューオーリンズについて書いた『危険な場所、度重なる強烈な嵐』に描かれている」。ヒューズ、一二〇―二一頁。コルトンの書誌は以下。Craig Colten, *Perilous Place, Powerful Storms: Hurricane Protection in Coastal Louisiana* (Jackson: University of Mississippi Press, 2009).

（6）ヨアヒム・ラートカウ『自然と権力―環境の世界史』、みすず書房、二〇一二年（原著二〇〇〇年）、二〇頁。

（7）この両者にかかわっている渡邉裕一の論文タイトルがその関心を物語っている。「アルプス山脈・レヒ川流域における森林労働と木材運搬―帝国都市アウクスブルクの史料から」（前者収録）、「中・近世のニュルンベルク帝国森林と政治諸権力―帝国都市とブランデンブルク辺境伯の対立構造を軸に」（後者収録）。

（8）高木は、日本における自然災害の当時の社会へのインパクトを、いわば第二の環境史へ至る視角として挙げている（一二～一九頁）。

（9）熊倉和歌子「限られた史料で何ができるか―中世エジプト環境史を模索する」『お茶の水史学』六二（二〇一八）（ここでは一八九頁）。『イスラム地域研究ジャーナル』九（二〇一七）の特集を参照（熊倉和歌子「環境・農業生産・記録管理：文書史料に基づくエジプト環境史の構築」、高橋亮介「ギリシア・ローマ期ファイユームをいかに捉えるか―環境史研究の一動向」、亀谷学「西暦七～一三世紀ファイユーム研究のために―文書と環境からのアプローチ」、熊倉和歌子「砂糖から穀物へ―マムルーク朝期のファイユームにみられた栽培作物の転換」）。

（10）熊倉和歌子「限られた史料で何ができるか―中世エジプト環境史を模索する」一八九頁。

（11）ヒューズ、上掲書、三、七―八頁。この点に関しては先行するドナルド・ウォースターの表現のほうが、より主観性を強調している（上掲註(2)参照）。

（12）ユクスキュル、クリサート著『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫、二〇〇五年、七頁。

（13）ラートカウ『自然と権力 環境の世界史』四九頁。

（14）大喜直彦『中世びとの信仰社会史』法藏館、二〇一一年、三五頁。

（15）竹中亨『西洋史学と実証』一九一号、一九九八年、四二～四九頁（ここでは四四頁）。その後の論争としては、

フォーラム「二十一世紀の西洋史学」『西洋史学』二〇〇号、二〇〇〇年、四六～六二頁。井上浩一「西洋史学の現代的課題―あるビザンツ史研究者の選択」『歴史科学』二一〇号、二〇一二年、一～一五頁など。日本西洋史学会第六三回大会（二〇一三年）の小シンポジウム「日本の西洋古代史研究：回顧と展望―独自性と国際性、貢献をめぐって―」においても関連する議論が交わされた。

(16) 西洋史における一例として、イギリスで一五世紀から一七世紀に刊行された英国関連の印刷刊行物（約一三万点）のデータベース Early English Books Online（初期英語書籍集成データベース、略称 ＥＥＢＯ）を挙げられる。これを活用して編まれた論文集『痛みと感情のイギリス史』（東京外国語大学出版会、二〇一七年）の編者である伊東剛史氏と後藤はる美氏、さらに論文執筆者の一人である那須敬氏による座談会は、具体性が高く参考になる。以下の URL を参照。
http://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/chadwyck/umi/eebotalk.htm
なお、中世ヨーロッパの宗教に関して不可欠なデータベースは、一九世紀にミーニュが編纂した「教父全集」のラテン教父全集全二二一巻を収録する「ラテン教父全集 *Patrologia Latina* 全文データベース」と、「古代・中世キリスト教聖人行伝 *Acta Sanctorum* 全文データベース」である。それぞれの紹介は以下の URL を参照。
https://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/chadwyck/christianity/patrologia_latina.htm
https://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/chadwyck/christianity/acta_sanctorum.htm